

農村におけるスポーツイベントに関する事例研究

— 愛媛県南宇和郡一本松町どろんこサッカーの場合 —

堺 賢治¹⁾

A case study on rural sport event

— The case of doronko soccer in Ipponmatsu-cho, Minamiuwa-gun, Ehime —

Kenji Sakai¹

Key words : rural sport event, community formation, rural okosi

(Bulletin of Department of Physical Education, Faculty of Education,
Ehime University, 4, 83-91, March, 2003)

キーワード：農村のスポーツイベント，コミュニティ形成，村おこし

I 序 論

現在，農村は過疎化や高齢化という大きな問題を抱えている。昔の農村のような地域のつながりがなくなり，共同体が崩壊しているといわれている。このような問題を解決するために，多くの農村ではイベントによる村おこし運動が行われている。村おこし運動は，農村のコミュニティ形成を進める「住民の郷土意識の高揚」の機能と農村の経済的基盤を確立する「地域振興」の機能の二つの機能を持っているといわれているが，ほとんどのイベントは前者の機能が強いといわれている。また，このイベントも多くの市町村において仕掛け人の手によって企画されてきた。その中でも，地方自治体が開催したイベントの内容をみると，スポーツ関連のイベントが多く，スポーツイベントは人気のあるものである¹⁾。

過去のスポーツイベントに関する研究をみると，どちらかというと，参加者の多い大きなスポーツイベントに関するものがほとんどであり，日本のどこにもあるような町村のスポーツイベントに関するものは少ないといえる^{2) 3) 4) 5) 6)}。まして公民館レベルで開催さ

れているスポーツイベントの研究はおこなわれていない。

そこで本研究は，大規模のスポーツイベントや町村レベルのスポーツイベントではなく，公民館レベルで開催されているスポーツイベントをとりあげ，農村の公民館レベルのスポーツイベントが村おこしにどのような影響を及ぼしているかを明確にすることを目的にした。事例としては，愛媛県南宇和郡一本松町正木^(注1)の篠山クラブが実施している「県境篠南騒動どろんこサッカー大会（以下，どろんこサッカーという）」を対象とした。

(注1) 一本松町は愛媛県の南端，南宇和郡の東部に位置し，高知県宿毛市に接した東西9km，南北15km，総面積72.29km²の町である。人口は平成10年4,401人の小さな町である。また，産業別人口については，昭和50年，第一次産業51.6%，第二次産業20.7%，第三次産業27.7%であったものが，平成7年には第一次産業19.2%，第二次産業38.4%，第三次産業42.5%になり，兼業農家の増加がみられる。調査地域の正木地区は一本松町でも農村地域であり，世帯数123軒，人口は390人の小さな地区である。

II 篠山クラブの概要

1. 一本松町の村おこし

一本松町の村おこし運動が表立って活動され始めた

1) 愛媛大学教育学部
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番

1. Faculty of Education, Ehime University,
Bunkyo-cho, 3, Matsuyama-shi, Ehime, 〒790-8577,
Japan

のは、昭和53年の一本松町壮年グループ連絡協議会の結成からであるといわれている。青年団から老人クラブに入るまでの30歳代から60歳代までの町民を対象とした壮年グループを各地区に結成し、壮年団の連絡協議会を設置した。現在、町内には8地区あり、15グループが組織され約600人が加入している。その一つのグループが篠山クラブである。なお、篠山クラブはそれに先立って昭和50年に結成された。

2. 篠山クラブの性格

(1) 成 員

クラブを構成しているメンバーは20歳代から40歳代までの男性38名である。

(2) 規 約

特には作られていないが、篠山クラブが出来た当初は、「だすい東」の状態で開催しよう。つまり、東が外れそうで外れない、東を立てると傾くが倒れない、これくらいやわらかい規約で、交流を深める会としてスタートした。

(3) クラブのかかる費用

クラブにかかる費用は、地元の草刈りを行ったり、町から町営の施設の清掃などをして自分たちで費用を捻出している。

(4) ねらい

「県境を越えて交流の輪を広げよう」を合い言葉に、地域に根ざした個性豊かな活動を図ることである。

(5) クラブ運営の役割分担

会長、副会長、会計の三役がある。任期は2年、三役が中心となり、篠山クラブの活動を行っている。

(6) 活動内容

地域の公民館活動の中心的役割を担い、地域活動の中心的役割をしている。篠山クラブが実施している主なイベントは次のようなものである。

4月：200匹の鯉のぼり

8月：盆踊り

9月：どろんこサッカー大会、大運動会

11月：花とり踊り

3. どろんこサッカー大会

昭和50年に結成されて以来、地域の公民館活動の中心的役割を果たしてきた篠山クラブであったが、従来通りの行事だけを消化するだけではおもしろくないので、「みんなで燃えるような感動するものをつくろう、自然に恵まれた県境の地域をアピールしよう」ということで何をするかの話し合いが行われた。試行錯

誤を繰り返していく中で出た案は、平成2年に地元の高校である南宇和高校がサッカーの全国大会で優勝したことにヒントを得ていた。田舎の高校でも頑張れば出来るのではないのかということになり、田んぼの中のサッカーということに決定した。

しかし、何かこだわりがほしいということになり、探していく中で、江戸時代初期の1657年頃に、正木地区が土佐と伊予との国境争いの中心となり、山内藩と伊達藩の命運を分けた篠南騒動があったことを知り、これにちなんで「県境篠南騒動どろんこサッカー大会」というネーミングになった。かつては泥試合をしていた地域が、今は仲良く騒いでいるということでこの名前に決定した。そして、平成3年度に第1回の大会が開催された。

本調査は平成13年度の大会（第11回大会）を対象に実施した。なお、この大会には、48チーム、331名の人が参加した。

Ⅲ 方 法

1. 調査対象

篠山クラブのメンバー 8名

表1は属性を示したものである。

表1 属性

氏名	年齢	職 業	地域の役員経験
A	24	団体職員	
B	26	自 営 業	青年団団長
C	33	団体職員	篠山クラブ会計、体協理事
D	37	公 務 員	篠山クラブ副会長、地区の班長
E	41	自 営 業	篠山クラブ会計、分館主事
F	41	会 社 員	篠山クラブ会長
G	42	公 務 員	篠山クラブ副会長、消防団郡団長
H	48	自 営 業	篠山クラブ会長、分館主事、体協理事

2. 調査方法

インタビューによる自由面接法

3. 調査期間

平成13年10月～12月

4. 調査項目

(1) どろんこサッカー

- ① 大会との関わり
- ② 大会開催の目的
- ③ 大会の効果

- ④ 大会への要望
- ⑤ 大会の継続
- (2) 地域活動
 - ① 地域活動の変化
 - ② スポーツ活動の変化
 - ③ 村おこし運動の変化

Ⅳ 事例研究

1. A氏

(1) どんこサッカー

準備段階では、他のメンバーと同じように寄付集めをしたが、寄付を集めることが出来なかった。寄付集め以外には、大会の一週間ぐらい前から大会で使う用具や商品などの整理をしたり、大会当日の案内板などを作っていた。

どんこサッカー開催の目的は、小さな田舎であるため人が少なくなっていく、過疎化していくことをくい止めるため、地域を活性化させるためにやっているのだと思う。地域活性化以外にも、他の地域との交流が目的ではないか。どんこサッカーが始まった頃は学生であり、どうしてどんこサッカーが出来たのかは正確には知らない。

どんこサッカーが開催されて良かったことは、準備などに行くことで色々な年代の人と交流を持つことが出来るようになったことである。地域にとって良かったことは、篠山という地名が色々な人に知ってもらえたこと、地域の住民が協力することが出来るようになってきたことである。

どんこサッカーへの要望は特にないが、これまでずっと頑張ってイベントを開催し、すこしマンネリになってきていると思う。実際にどんこサッカーを止めるという話も出たが、止めるなら止めるでいいと思うし、続けるなら続けるで協力していきたいと思う。

どんこサッカーは続けていけばいいと思うが、これ以上規模大きくするのではなく、みんなで楽しく出来るイベントであればいいと思う。

(2) 地域活動

どんこサッカーが開催されるようになってからのスポーツ活動の変化は、変化というものはみられないと思う。どんこサッカーは、一種の見せ物みたいになっており、どんこサッカーがあるからといって運動をしてみようと思う人は少ないと思う。

どんこサッカーが開催されることによって、地区の村おこし運動に変化があったかどうかはわからない。どんこサッカーが開催され始めた頃中学生

であったので、開催された頃のことかわからず、変化はわからない。しかし、地域のお年寄りの人や篠山クラブを引退した人たちは、どんこサッカーに誇りを持っていると思う。

2. B氏

(1) どんこサッカー

準備段階では、寄付集めをしたり、1週間ぐらい前になると集会場に集まって大会に向けて準備をしているが、準備には行かない。

どんこサッカー開催の目的は、村おこしだと思うが、あまりよくわからない。みんながやってるからやっている。

どんこサッカーが開催されて良かったことは、1日だけでも色々な場所から人が来てくれることである。地域にとって良かったことは、年に一回だけでも色々な場所から人が来てくれることである。

どんこサッカーへの要望は特にないが、10年を区切りとして、どんこサッカーを止めるとか色々な話がでていたが、続けていくと決めたならば文句を言わずにみんなでやっていけばいいと思う。

どんこサッカーの継続については、続けていけばいいと思う。年に一回しかないものだし、なくなってしまったら寂しいと思う。他の地域にも、どんこサッカーを楽しみにしている人もいるので、続けていけばいいと思う。

(2) 地域活動

どんこサッカーが開催されるようになってからの地域活動・スポーツ活動の変化は、4年ぐらい前に帰ってきたので、変化したかどうかはわからない。

どんこサッカーが開催されることで、地区の村おこし運動に変化があったかどうかはわからない。県外に出ていたので、開催された頃のことわからないし、その後もどのようになっていったのかわからない。

3. C氏

(1) どんこサッカー

準備段階では、篠山クラブ三役の会計をしているので、出納に関することをしていた。購入品などによるお金の出し入れ、弁当や飲み物の購入などをしていた。

どんこサッカー開催の目的は、村おこしが目的ではないかと思う。どんこサッカーが開催され始めた当初は、正木地区にいなかったので当初の目的というものはわからない。田舎でも出来ることはな

いだろうかということでは始まったと聞いている。

どろんこサッカーが開催されて良かったことは、地域の人と関わる機会が出来たことである。自分は養子であり、違う地域に住んでいたため、地域のつながりが強い田舎に住むことに不安を感じていた。しかし、どろんこサッカーに限らないが篠山クラブの活動があることで、地元の人たちに上手く溶け込むことが出来た。地域にとって良かったことは、地域の人たちが一つの目標に向かって協力することだと思ふ。実際全員が納得して活動できているわけではないが、そのような状況でも地域で目標を持って活動できることはいいことだと思ふ。

どろんこサッカーへの要望は特になく、問題点といえば、よく言えば定着といえるかもしれないが、マンネリ化ではないかと思ふ。他にも資金面も問題だと思ふ。イベントを開催することはかなりの資金が必要であり、資金繰りが難しい。写真コンテストなどは、すべての資金をクラブから持ち出して行っている。このままの状態ですべてイベントを開催し続けることは難しいと思ふ。

どろんこサッカーの継続については、先輩方が続けてきたことなどで出来るところまではやっていくべきだと思ふ。どうしても開催することが出来なくなれば、町が援助してくれるのではないかと思ふ。

(2) 地域活動

どろんこサッカーが開催されたことによる地域活動の変化は、多少は変化していると思ふ。自分から進んでという人は少ないが、何か頼めば快く承知してくれる。

どろんこサッカーが開催されるようになってからのスポーツ活動の変化は、あまりみられない。狭い地域なので、変化という変化はあまりみられないと思ふ。

どろんこサッカーが開催されることで、地区の村おこし運動に変化があったかどうかはわからない。しかし、地域の知名度は上がったと思ふ。本当に人が住んでいるのか疑うようなところだが、地域の名前を知っている人は多い。また、周辺地域の人たちも、どろんこサッカーを楽しみにしてくれている人がいて、とてもうれしかった。

4. D氏

(1) どろんこサッカー

準備段階では、資金活動や協賛のお願いに行ったりしていた。大会の2週間前ぐらいから、案内看板の作成などをしてきた。去年まで三役をしていたので、今年も三役の人たちの手伝いをした。

どろんこサッカー開催の目的は、地域の活性化とすることを目的に開催していると思ふ。正木地区は過疎化が進行しているが、他の地域に比べると後継者も多く地元に残っている。しかし、イベントなどがないとどうしても自分たちだけのところに引きこもりになってしまう傾向がある。自分は1回目から参加しているが、地域活性化という面で開催していると認識している。どろんこサッカーを開催することが色々な面に波及していけばいいと思ふが、そこまで行っていないのが現状である。

どろんこサッカーが開催されて良かったことは、みんなで作り上げる達成感を味わえることである。実際かなりの労力を要するが、毎年イベントを開催するのは達成感があるからではないかと思ふ。地域にとって良かったことは、イベントを開催するには準備が必要になってくる。頻繁に地域の人が集まって雑談をしたりする機会は、他にはなかなかないと思ふ。

どろんこサッカーに対する要望は、もっとこぢんまりとしたイベントにした方がいいのではないかと思ふ。最近、若い人たちのクラブに入ってくる人数も減ってきている。どろんこサッカーも始めた頃に比べると、かなり大きな規模のイベントとなってしまった。若い人も入らないまま、この規模のイベントを続けて行くことは難しいのではないかと思ふ。

どろんこサッカーの継続については、地域のイベントとして開催するのなら続けていけばよいと思ふ。どろんこサッカーも開催当初は、16チームの参加からスタートし、テレビなどで報道されることによって有名になり、参加チームの応募が増え、大会の規模も大きくなってきた。しかし、準備の人数や主催者側の事情を考えると、コートも2面以上にすることは出来ないし、参加チームを50チーム以上増やすことは出来ない。これからは篠山クラブが主催するで構わないが、地域のバックアップなければ、篠山クラブのクラブ員数などを考えると難しいのではないかと思ふ。

(2) 地域活動

どろんこサッカーが開催されるようになってからの地域活動の変化は、変化というものは感じられないと思ふ。地域活動を篠山クラブ中心で行っているが、クラブが活動しているからということで地域の人たちの積極的な参加がないように思ふ。何かを頼めば協力はしてくれるが、地域活動ということになるとクラブが主体になって行ってもそれ以外の地域の人たちも積極的に活動しなければ、地域活動といえないと思ふ。

どろんこサッカーが開催されるようになってからのスポーツ活動の変化は、あまりみられないように思う。

どろんこサッカーが開催されることによって、地区の村おこし運動に変化があったようにはあまり感じない。どろんこサッカーに限っていえば、村おこし運動とかまで気がまわらない。イベント自体を開催して無事終わらせることで精一杯である。どろんこサッカー以外に村おこしといったことは、表だって活動していない。大きなイベントがあるとそのイベントを中心にまわっていくというのは、ある意味ではしかたないことではないかと思う。

5. E氏

(1) どろんこサッカー

準備段階では、音響関係・放送施設の準備をしていた。放送設備のなどの準備は前日だけだが、その他には寄付集めをしたり、クラブの資金を作るために草刈りを行ったりしていた。

どろんこサッカー開催の目的は、年齢差に関わらず、地域の中で関わることによって仲間意識を作ることだと思う。どろんこサッカーを開催することによって、準備のために集まり一緒にやることが出来、どろんこサッカー以外の地域活動などにもみんなで仲良くやることが出来る。

どろんこサッカーが開催されて良かったことは、何でもやれば出来るということを教えられた。どろんこサッカーはかなりの経費がかかり、寄付だけに頼って開催することは出来ない。そのためには、草刈りなどをして自分たちで出来るだけ資金を稼がなくてはいけない。他の壮年グループの人からは、「そんなにしんどいことをそこまでする必要あるのか」といわれるが、しんどいことでも目標があれば、何でも出来るということがわかった。地域にとって良かったことは、地域の名前を色々な人に覚えてもらったことではないかと思う。日本一名前の長い小・中学校ということも、どろんこサッカーによって多くの人に知ってもらえることが出来たと思う。婦人会も、どろんこサッカー当日のうどんの販売やバザーをし、子どもの剣道部の部費などを稼ぐことが出来たことも地域としては良かったのではないかと思う。

どろんこサッカーへの要望は、ここ最近の大会は部署が固定的になってきているので、少しずつでも変えていってほしい。篠山クラブ自体も毎年続けて10年以上もどろんこサッカーを開催しているので、マンネリ化している部分もあると思う。マンネリ化

解消の一つの手段として色々な部署を担当してみるのもいいのではないかと思う。

どろんこサッカーの継続については、続けていけばいいと思う。続けていくべきだとは思いますが、後継者が育っていないように思う。後継者が育たないことには続けていくことは出来ないと思う。続けていくことは大切だが、維持していくことも並大抵のことではないと思う。

(2) 地域活動

どろんこサッカーが開催されるようになってから地域活動の変化は、あまり変わっていないと思う。狭い地域の中では、参加者が増えたのかどうかはわからない。交流自体は盛んになったと思う。その他にも地域外の壮年グループとの交流などが増えたと思う。

どろんこサッカーが開催されることによるスポーツ活動の変化は、あまりないと思う。どろんこサッカーはある種特殊なものなので、どろんこサッカーが開催されたからといってスポーツ活動の変化があるとは思わない。しかし交流が盛んになったという面では、スポーツ活動に影響がでているのかもしれないが、狭い地区なので変化がないのだと思う。

どろんこサッカーが開催されることによる地区の村おこし運動の変化は、盛んになった時期もあったと思う。今は落ち着いていると思う。やり始めた頃は、盛んになっていたかもしれないが10年という期間が経っているのでかなり停滞期になっていると思う。

6. F氏

(1) どろんこサッカー

準備段階では、スポンサーからの寄付集めをした。経費がかなりかかるので、寄付集めをしないとどろんこサッカー自体が開催できない。三役以外のクラブ員が活動を始めるのは、だいたい2ヶ月前からだが、三役の役員は3ヶ月前ぐらいから少しずつ手配を始めている。

どろんこサッカー開催の目的は、田舎に住んでいる人間でも元気なことをしていることをアピールしたり、もうこの地域には住んでいない人に自分の出身地は元気なことをしているということをアピールしたり、地域の人たちの交流の場を作ることを目的にしていると思う。どろんこサッカーをしているから、人をたくさん呼んでやりたいとは思わない。だからマスコミにも取りあげてほしいとは思わない。自分たちでやっていることなのだから、自分たちで楽しくやればいいと思う。地域の人たちで集

まる機会も多くできたし、定例会のような議題がある会ではないので、雑談の中から色々なコミュニケーションをとることが出来る。

どろんこサッカーが開催されて良かったことは、地元の年輩の方をはじめ色々な人に自分が知らない色々な情報や知識を教えてもらうことが出来ることである。文章などではわからないことなども、教えてもらったりすることが出来る。実際に言葉だけでは伝えられないことはたくさんあると思う。言葉などで伝えることが出来ない知識や知恵は、自分たちが受け継ぎ、次の世代に教えなければいけないことだと思う。地域にとって良かったことは、どろんこサッカーが開催されることで地域をアピールすることが出来ることだと思う。自分の地元が有名になると、他の地域に行ったときでも自分のマナーなどが地域の印象となってしまうので、きちんとすることが出来るのではないかと思う。また他の地域に住んでいる人でも、正木地区に住みたいという声も聞けるようになってきた。

どろんこサッカーへの要望は、冗談ととられるかもしれないが、県境騒動ではなく世界選手権にしたい。外国人にも多く出場してもらい、出場チームが多いようなら、1次リーグ・2次リーグといったようにして、年間を通してどろんこサッカーが出来るようにしたい。年間を通して出来るようになれば、かなり盛り上がるのではないかと思う。

どろんこサッカーの継続については、続けていくべきだと思う。もしもどろんこサッカーがなくなってしまうたら、地元に住んでいても職種などが異なるので2ヶ月、3ヶ月顔をあわせない人もでてくるだろう。それでは地域としてのつながりを持つことは出来ないと思う。みんなで集まって活動することでつながりというものは保っていけるのだと思う。地域の住民からもどろんこサッカーだけは、「続けていくべき、力が足りないことがあれば、力を貸すから」という声が多いので、土地が許す限り続けていくべきだと思う。

(2) 地域活動

どろんこサッカーが開催されるようになってからの地域活動の変化はあると思う。増えていると思う。どろんこサッカーを例にしても、直接的に活動に関わりなくても、出場している人を見に来てくれるだけでも、十分だと思う。当日に集まってくれるだけでも、地元の色々な人に会い、コミュニケーションをとることが出来る。

どろんこサッカーが開催されることによるスポーツ活動の変化は、多少はあると思う。人数的には少

ない地域なので、団体スポーツはなかなかできないが、どろんこサッカーなどは5人で行われているサッカーである。団体スポーツでも少し考え方を変えれば、団体スポーツも出来るということがわかったと思う。

どろんこサッカーが開催されることによる地区の村おこし運動に変化はあったと思う。クラブ員や地域の人の活動への地域活動への参加率は上がったと思う。地域活動への参加率以外にも、地域住民の意識も変わってきたと思う。クラブ以外の人でも、「何か出来ることがあれば手伝う」ということを言われる。直接的でなくても間接的に活動に参加してくれるようになってきた。出来ることを出来る時間の範囲で手伝ってくれるようになってきたことはいいことだと思う。

7. G氏

(1) どろんこサッカー

準備段階では、寄付集めと参加チームの受付などをしていて、対外的な参加チームの受付であるとか地区外へのPR活動などを主にやっていた。あとマスコミへの後援申請とか、新聞への広告の掲載などの仕事も手伝った。

どろんこサッカー開催の目的は、当初は地域外の人を地域に来てもらい、今までに実施していた以外の行事も出来るということを示すことだと思う。その他にも嫁さんが来なくなるような地域など色々目的はあると思う。地域活性化とよくいわれるが、何が地域の活性化になるのかということがわからなかったので、今までの盆踊りなど内々の行事ばかりでなく、外部の人も巻き込んだイベントを作り、一つの地域活性化の起爆剤になればいいと思い始めた。

どろんこサッカーが開催されて良かったことは、自信を持つことが出来るようになった。どのようなことが地域づくりかどうかわからなかったので、自分たちがやってきたことは地域づくりではないと思っていたが、外部に行って話すと地域がよくまとまっているなどと言ってもらえる。これは自分たちの自信にもなり、してきたことが認められたのでうれしかった。地域にとって良かったことは、地域の人が見なくなったことである。以前は、山の中で外部と接する機会が少なく大勢の人が来る機会がなかったが、どろんこサッカーが開催されることで外部と接するいい機会となり、恥ずかしがらずに、来た人と標準語を使わず話すことが出来るようになった。

どろんこサッカーへの要望は特にはない。しかし、どろんこサッカーを始めた当初のクラブ員の人たちがOBになっているので、その人たちの力を借りたい。準備をするにしても、その人たちがの方が上手いので、何かバックアップしてもらえよう体制を作っていきたい。

どろんこサッカーの継続については、続けていくべきだと思う。しかし、どろんこサッカーの趣旨とか信念とかなどがわかっていないと苦勞ばかりで色々問題が出てくると思う。どろんこサッカーを止めるとはなかなかいえないだろうが、このまま維持出来ないのであれば規模を縮小したり、新しい企画の立案など考えていかなければいけないと思う。

(2) 地域活動

どろんこサッカーが開催されるようになってからの地域活動の変化は、初回からいえば増加しているが、現在は停滞している。しかし、手伝ってくれるように頼めば手伝ってくれる。自分から進んで出て来るというのは少ない。

どろんこサッカーが開催されることによるスポーツ活動の変化は、盛んになっているものもあると思う。地域でいえばソフトボールが盛んになっていると思う。ユニフォームを作って郡大会に出場したりしている。しかし、波はあると思う。

どろんこサッカーが開催されることによる地区の村おこし運動に変化はさほどみられない。積極的な提案はしてこないが、こちら側から提案していけば協力してくれる。しかし、イベントが終わって少しするとやる気が落ちてしまう。

8. H氏

(1) どろんこサッカー

準備段階では、どろんこサッカーのコートを作る際に、あぜというものを作るのだが、自分はそのあぜを作る係りであった。あぜというのは、水をたくさん入れて作っているどろんこサッカーのコートの水をせき止めるためのものである。

どろんこサッカー開催の目的は、地域づくりとっているが、お祭り騒ぎではないかと思う。当初は何かをやるとういうことが目的であったと思うが、回を重ねるごとにどんどん盛大になってしまい、止めるに止められなくなっているのが現状ではないだろうかと思う。

どろんこサッカーが開催されて良かったことは、篠山クラブの団結が出てきたことだと思う。資金も結構かかるが、自分たちで草刈りなどを請け負って自分たちで資金を作る努力をしたりと、自分たちで

努力して活動できるようになってきた。地域にとって良かったことは、住民の何倍という人が集まるので活性化にはなっていると思う。町の援助なしに篠山クラブ独自で開催していることも、地域にとっていいことだと思う。

どろんこサッカーへの要望は特にはない。しかし、現状維持していくことはかなり大変ではないかと思う。準備とかもかなりの時間を費やしている。

どろんこサッカーの継続については、続けていけばいいと思う。正木地区一番のお祭り騒ぎであるし、高知県側の住民も数多く協力してくれている。しんどいことも多いだろうが、出来るところまで続けていってほしいと思う。

(2) 地域活動

どろんこサッカーが開催されるようになってからの地域活動の変化は、地域住民の参加率は上がったと思う。また、色々頼めば協力してくれるようになった。地域活動は篠山クラブや婦人会などの各団体が協力して行うことが出来るようになった。

どろんこサッカーが開催されることによるスポーツ活動の変化は、あまりなかったように思う。

どろんこサッカーが開催されることによる地区の村おこし運動に変化はあったと思う。地域の住民の人たちも、どろんこサッカーが近づく色々どろんこサッカーのことを気にかけてくれているし、どろんこサッカーをととても楽しみにしてくれている。地域の人たちもどろんこサッカーをイベントとして楽しみにしてくれている。

9. 考 察

(1) どろんこサッカー

どろんこサッカー開催の目的は、A氏、D氏、G氏は地域活性化、B氏、C氏は村おこし、E氏、F氏は地区の人々の交流の場を作り、仲間意識を高めることなど色々あるが、地域のためにという目的で開催されていることがわかる。

どろんこサッカーが開催されて良かったことは、A氏、C氏は、地域内で交流を持つことが出来たということあげている。B氏は、地域外から多くの人に来ることをあげている。D氏は、イベントが終わった後の達成感を味わうことが出来ることをあげている。E氏は、目標があればしんどいことでも出来るということを教えられたことをあげている。F氏は、地域住民と交流することによって、様々な知識や情報が得られたことをあげている。G氏は、地域がまとまっていると評価されて自信を持つことが出来たことをあげている。H氏は、地域内での団結

が出来たことをあげている。地域にとって良かったことは、A氏、B氏、E氏、F氏は地域の知名度が上がったことをあげている。A氏、C氏は、地域住民の協力が出来るようになったことをあげている。D氏は、地域の人々が頻りに集まって交流できることをあげている。G氏は、地域が明るくなったことをあげている。

イベントを開催することで、地域住民が集まる機会が増えて地域の交流が促進されていることがわかる。昔に比べ地域のつながりが薄れてきている農村においては、このように人とふれあいコミュニケーションをとる機会が必要であると考えられる。また、地域住民や篠山クラブのメンバーの内面的な成長にも影響を与えていることがわかる。さらに、マスコミが取りあげたり、他の地域から多くの日々とが参加することにより地域の知名度を上げていることがわかる。これらのことは、地域のコミュニティ形成をうながす「住民の郷土意識の高揚」の機能を持つものと思われる。

どろんこサッカーへの要望は、A氏、C氏、E氏がマンネリ化の解消をあげている。また、C氏は、資金面での充実もあげている。B氏、H氏は、どろんこサッカーの継続をあげている。D氏は、どろんこサッカーの縮小をあげている。F氏は、どろんこサッカーの規模の拡大をあげている。G氏は、地域をあげての協力体制の確立をあげている。メンバー間に規模の縮小と拡大の意見の対立がみられ、今後のイベントとしてのあり方を篠山クラブ内ではっきりとしていく必要があると思われる。

どろんこサッカーの継続については、全員賛成している。しかし、A氏は、みんなが楽しめるイベントにすることをあげている。C氏は、町が援助してくれることをあげている。D氏は、地域のバックアップがなければいけないことをあげている。E氏は後継者を育てることをあげている。G氏は、規模の縮小や新しい企画の立案をあげている。イベントの地域に与える影響を理解してイベントの継続には賛成しているが、現状のままではイベントの継続が難しい状況であることがわかる。

(2) 地域活動

どろんこサッカーが開催されることによる地域活動の変化は、A氏、B氏は、年齢が若いこともあり、どろんこサッカーが始まってからの地域活動が変化したかどうかはわからないとしている。C氏は、多少の変化はあったが住民の積極性はあまりないとしている。D氏、E氏は、地域活動の変化はあまりみられないとしている。しかし、E氏は、他の

地域の壮年グループとの交流は増加したとしている。F氏、H氏は、地域活動に変化はみられたとしている。しかし、H氏は、C氏と同様に積極性のある住民はあまりいないとしている。G氏は、どろんこサッカー開催当初から比べると変化はみられるが、現在は停滞しているとしている。地域活動にあまり変化がみられない理由として、狭い地域であるためイベントを開催することで交流自体は盛んになったが、直接地域活動の変化にあまり結びつかなかったのではないかと考えられる。

どろんこサッカーの開催によるスポーツ活動の変化について、A氏、B氏、C氏、D氏、E氏、H氏はあまりみられないとしている。F氏は、多少の変化がみられるとしている。G氏はスポーツ活動全体では波があるが、盛んになっているものがあるとしている。スポーツ活動に関しても地域活動と同様に狭い地域であるためスポーツ活動の絶対数が少ないために変化に結びついていないのではないかと考えられる。

どろんこサッカーが開催されることによる地区の村おこし運動に変化があったかどうかについて、A氏、B氏、C氏は、わからないとしている。D氏、G氏はあまり感じていないとしている。E氏は、定期的に盛んになった時期もあったとしている。F氏、H氏は、村おこし運動に変化があったとしている。村おこし運動に変化があったと答えているメンバーは、篠山クラブで中心的存在として活動している比較的年配のメンバーである。それに対して、わからないと答えているメンバーは若いメンバーである。村おこし運動に関して意見の相違が出たのは、地域全体を把握して篠山クラブを運営していかなければいけないメンバーとまだ断片的しか地域を把握していない若いメンバーとの相違によるものではないかと思われる。しかし、どろんこサッカー自体が村おこし運動であり、開催当初に比べて参加チームは増えて、イベントの規模は大きくなっている。このことから村おこし運動は確実に盛んになっているものと考えられる。

V 結 論

どろんこサッカーは、地域の壮年グループが地域を活性化したいという熱意から始まったスポーツイベントであり、地域を活性化させるためにはこうした中心となる集団が必要である。また、公民館レベルのスポーツイベントであるが、市町村レベルのスポーツイベントと同様に「住民の郷土意識の高揚」の機能があ

ることがわかった。

どろんこサッカーは、準備段階において、何回かの会合を重ね、資金集めなどをみんなでおこなう。このことが地域の常会などとは違った雑談をまじえた交流が出来る場を提供している。また、交流を通じて篠山クラブの結束力を高め、「地域のために」という気持ちを持ちイベントを開催している。コミュニティ形成は、自分たちのことから他人のことを考え、行動することによって成し遂げられていく。しかしながら、これを持ってコミュニティが出来たということは出来ない。コミュニティ形成はラスパイエル式に限りなく続いていく。地域活動やスポーツ活動にあまり変化はみられなかったというが、これも今後の課題であろう。

地域の人間関係の希薄化が時代とともに進んでいる中、行政に頼らない公民館レベルのイベントは、補助金財政に頼らない農村の村おこしにつながるのではあるまいか。何かをやり遂げたという自信がこれからの新しい活動につながる。このような公民館レベルのイベントが各地に出来ることが日本の農村の活性化になるものと思われる。

今後の課題として、篠山クラブのメンバーの間にもどろんこサッカーに関する考え方の相違がみられ、もう一度、篠山クラブとしてどろんこサッカーに対する考え方を見直す時期に来ていると思われる。しかし、どろんこサッカーの地域に与える影響は大きく、イベントの中止ではなく、新しいどろんこサッカー像を構築することが必要であろう。どろんこサッカーの開催によって得られた自信を持つことが、農村における過

疎化、高齢化、地域共同体の崩壊、などの様々な問題に対処していけるように、今後の村おこし運動に発展させていくことが必要であるのではないだろうか。

本研究の現地調査及び資料収集等に御協力をいただいた相原宏紀氏に深く感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 平野繁臣, 平野暁臣 (1987) 「イベント富国論」 東急エージェンシー
- 2) 堺賢治 (1997) 「スポーツイベントに関する研究—ボランティアの場合—」 愛媛大学教育学部保健体育紀要 第1号 pp.83-88
- 3) 堺賢治 (1998) 「スポーツイベントに関する研究(2)—参加者の場合—」 愛媛大学教育学部保健体育紀要 第2号 pp.69-75
- 4) 堺賢治 (2000) 「スポーツイベントに関する研究(3)—住民の場合—」 愛媛大学教育学部保健体育紀要 第3号 pp.61-68
- 5) 幸田三広他6名 (2001) 「山口県大島郡におけるスポーツイベントの事例研究—その1. サザン・セット大島少年サッカー大会の開催経過と現状について—」 日本体育学会第52回大会号 p.391
- 6) 菱山士朗他6名 (2001) 「山口県大島郡におけるスポーツイベントの事例研究—その2. サザン・セット大島少年サッカー大会がもたらした効果と課題—」 日本体育学会第52回大会号 p.392